自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす影響：対人関係，自己呈示の信憑性および自己呈示規範内在化傾向との関連性の検討

吉　田　綾　乃

要旨： 本研究では，自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす影響について検討した。自己呈示者と受け手の関係性（友人・知り合い）と，自己呈示の信憑性（高・低），自己呈示規範内在化傾向（高・低）の効果を検討した。133 名の女子学生を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果，（1）知人による信憑性が低い自己卑下呈示は，受け手に自己批判傾向を生じさせる，（2）友人による信憑性の高い自己卑下呈示は，受け手に自己向上傾向を生じさせる，（3）自己卑下呈示規範内在化高群において，他者の自己卑下呈示は常に自己批判傾向の生起と結びついているが，自己卑下呈示規範内在化低群では，対人関係および信憑性が自己批判傾向の生起を左右することが示された。考察では，自己卑下呈示によって受け手に自己批判が生じることが文化的な自己呈示規範の形成に寄与している可能性について論じた。

キーワード：自己呈示，自己卑下呈示，自己評価

問　　題

自己呈示は，他者との関係の中で自己の勢力を増大しようとする動機に基づき，自己の特性に関する他者の帰属を誘発あるいは形成するために行われる行動（Jones & Pittman, 1982）と定義される。しかしながら，近年では自己呈示を特定の場面で生じる勢力の拡大を目的とした表面的な振る舞いとして限定的に扱うのではなく，日常的な社会的相互作用も含め，広く目標志向的なコミュニケーションとして捉えることが提唱されている（e.g., 福島，1996；Schlenker & Weigold, 1992；Schlenker & Pontari, 2000；Tice, Buttler, Muraven, & Stillwell, 1995）。例えば，Leary, Allen, & Terry（2011）は，過去 50 年間の自己呈示研究の多くが実験室で行われており，日常的な自己呈示が反映されていないことを指摘し，自己呈示の定義や機能を再考する必要性を主張した。日本でも，自己呈示の効果を扱った実証研究が十分に行われていないこと（沼崎・工藤，2003），自己呈示は日常的には具体的な他者に対して行われるにもかかわらず，受け手の要因が十分に検討されてこなかったことが指摘されている（村上・石黒，2005；Tice et al., 1995）。自己呈示を，呈示者と受け手の双方向のコミュニケーションとして捉え，その効果について実証的な検証を行う必要性があるといえる（吉田・浦，2003b）。

日本を始めとする東アジア文化圏では，自己卑下呈示がしばしば認められることが報告されて

きた（e.g., 村本・山口，1994）。自己卑下呈示とは「他者に対して選択的に自己の否定的な側面を提示すること，自己の肯定的な側面を積極的に呈示することを避けること」（吉田・浦，2003b, p. 121）と定義される。自己卑下呈示の効果に関する研究では，日本では，自己卑下的に振る舞う人物は他者から好印象を獲得すること（吉田・古城・加来，1982），他者からの賞賛に対して自己卑下呈示的に振る舞う人物は，社会的に望ましく，個人的に親しみやすいが活動性が低い人物と見なされること（樋口・川村・原・塚脇・深田，2007）が報告されている。また，自己卑下呈示に対して受け手が作為性を高く認知するとき，呈示者の印象が否定的な内容になることも見出されている（稲富・山口，2003）。さらに，自己卑下呈示よりも，自身の優れた能力に言及する自己高揚呈示に対して，受け手が呈示者の能力を高く推定する傾向があることも報告されている（沼崎・工藤，2003）。これらの研究から，日本において行われている自己卑下呈示の研究は主に受け手が呈示者に対して形成する印象に焦点が当てられてきたといえる。

しかしながら，自己卑下呈示は受け手が呈示者に対して形成する印象にのみ影響を及ぼすわけではない。他者の自己卑下的な振る舞いは，受け手の自分自身に対する認知や評価に影響を及ぼす可能性がある。日常生活の中で行われる身近な他者の自己卑下呈示を，受け手が自分自身と全く関連性が無い他者の振る舞いとして切り離して捉えることが困難であろう。そのため，他者の自己卑下呈示によって，自分自身にも劣ったところがあると見なす自己批判傾向や，自分も努力しなければならないとする自己向上傾向が生じる可能性がある。そこで，本研究では，他者から自己卑下的に振る舞われることが，受け手の自己評価にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。また，これらの影響過程に，呈示者と受け手の関係性，自己呈示の信憑性，受け手の自己呈示規範内在化傾向（吉田・浦，2003a）が及ぼす効果を検討する。

自己卑下呈示者と受け手の関係性

自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす影響は，呈示者と受け手の関係性によって影響を受けることが考えられる。例えば，Tice ら（1995）はアメリカ人を対象に，知人には自己高揚的な呈示が行われるが，友人にはやや控えめな自己呈示が行われることを見出している。また，石黒・村上（2007）は日本人を対象に「良く知らない顔見知り」と「友人」では自己卑下的な振る舞いの頻度が異なることを明らかにしている。さらに，笠置・外山・大坊（2008）は会話中に相互作用相手が示した自己呈示方法が，受け手の自己呈示スタイルに及ぼす影響を検討している。彼らは自己卑下的もしくは自己高揚的自己呈示を行うサクラと会話し，その時の反応がどの程度自己卑下的な振る舞いになるかを測定した。その結果，相互作用において相手が自己卑下的，自己高揚的な自己呈示を行っても，返報性の規範による影響は生じず，受け手は自らの自己呈示方法を変化させないことを見出している。そして，影響が認められなかった原因として実験参加者と協力者との関係性の影響を指摘している。具体的には，受け手は相手との将来の相互作用の予期がある場合には，相互作用相手の自己呈示方略の影響を受けるのではないかと論じている。笠

置ら（2008）が主張するように，将来の相互作用の予期が影響の有無に重要であるとすれば，相手との関係性の深さが，自己呈示が受け手に及ぼす影響を左右する可能性が考えられる。

よって，自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす効果を検討する際に呈示者と受け手の関係性を考慮することは重要であるといえる。そこで本研究においても相互作用予期のある「友人」と，相互作用がそれほど予期されない顔見知り程度の「知人」を取り上げる。そして，知人よりも友人の自己卑下呈示が受け手の自己評価により影響を及ぼすと予測する。

自己卑下呈示の信憑性の影響

沼崎・工藤（2003）は，自己呈示者の能力推定に関する効果が実験室実験とシナリオ法では異なることを見出した。そして，これらの検討方法による違いが認められる理由として自己呈示行動の信憑性が影響している可能性を指摘している。自己呈示の信憑性を左右する要因のひとつに自己呈示動機の顕現性がある。自己呈示の顕現性とは「ある行動が自己呈示のためにとられた行動であることが明白であると受け手に知覚されるかというものであり，自己呈示の動機の顕現性が強いほど行動の信憑性が低くなる（沼崎・工藤，2003, p. 46）」とされる。そして，自己呈示の顕現性が強く信憑性の低い自己呈示は，受け手が行う呈示者の能力推定に影響を及ぼさない可能性が指摘されている（沼崎・工藤，2003）。

このような自己呈示の顕現性による信憑性の高さは，自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす影響を左右することが予測される。本研究では，知人と友人の自己呈示した事柄に対する情報を有しているか否かを操作することによって，これらの自己卑下呈示の信憑性の効果を検討する。

具体的には，受け手が友人や知人の自己呈示内容に関する情報を有しており，自己卑下であることが明白な場合（自己呈示の顕現性が強い），信憑性は低くなるため，受け手の自己評価に及ぼす影響は小さくなるだろう。対して，受け手が自己呈示内容に関する情報を有していない場合（自己呈示の顕現性が弱い），信憑性は高くなるため，受け手の自己評価に及ぼす影響は大きくなると予測する。

自己呈示規範内在化傾向の影響

吉田・浦（2003a）は「自己卑下的な呈示を行うことは望ましい」という規範を内在化する程度である自己卑下呈示規範内在化傾向を測定する尺度を開発した。そして，自己卑下呈示規範内在化高群と低群では，他者から返される反応の受け止め方，自己卑下呈示が精神的健康に及ぼす影響が異なることを見出している（吉田・浦，2003b）。よって，本研究においても，受け手の自己卑下呈示規範内在化傾向が他者の自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす影響が異なると予測し，探索的な検討を行う。自己呈示規範を強く内在化している人，あるいは内在化していない人では，他者の自己卑下・批判的な呈示の解釈の仕方およびその呈示が及ぼす自己評価への影響が異なることが考えられるためである。

なお，本研究では日常的な自己呈示には性差の影響が大きいこと（Leary, Nezlek, Down, Radford-Davenport, Martin, & McMullen, 1994），女性は男性よりも謙遜する傾向があること（吉田ら，1982；相川，2003）を踏まえ女性を対象に調査を実施する。

方　　法

調査対象者

女子大学生を対象とした質問紙調査を行った。回答に不備にあったものを除き133名が分析対象者となった。平均年齢は19.87歳（SD=1.87）であった。

質問紙構成

自己呈示規範内在化尺度　吉田・浦（2003a）が開発した尺度の改訂版（吉田・浦，2003b）を用いた。自己高揚呈示規範内在化傾向を測定する11項目と自己卑下呈示規範傾向を測定する11項目から構成される。「全く望ましくない」から「非常に望ましい」までの5件法であった。

対人関係と自己呈示の信憑性の操作　自己呈示者と受け手の関係性と自己呈示の信憑性は刺激文によって操作した。知人条件では「普段，教室であった時に挨拶をする程度の同性の知り合いを思い浮かべてください」とし，友人条件では「数ヶ月にわたる付き合いがあり，休日には一緒にどこかへ遊びに行くこともある，あるいは機会があれば遊びに行きたいと思っている同性の友人を思い浮かべてください」とした。続いて「あなたがその人と会話をしていたところ，話の流れの中で彼女が自分自身の事柄について“全然だめだ”，“私にはいいところがない”などと自分を悪く言い始めました」と自己卑下呈示場面の想定を求めた。次に信憑性の操作を行った。信憑性低条件では「その時あなたは，彼女が言っている事柄についてよく知っており，彼女が実際以上に自分を悪く言っており，彼女の言っていることが正しくないことを判断できる情報を持っていました」とし，信憑性高条件では，「あなたは彼女が言っている事柄について，彼女が本当に劣っているのか，あるいはそうではないのかを判断する情報を持っていません」とした。

受け手の自己評価測定尺度　他者の自己卑下呈示を受けた後に，「あなたは自分自身に対してどのように感じると思いますか」と問うた。11項目からなる尺度を作成した。「全く当てはまらない」から「当てはまる」までの5件法であった。

自己呈示場面のイメージのしやすさ　呈示場面のイメージのしやすさについて「イメージできた」から「できなかった」までの1項目5件法で問うた。

日常的な自己卑下呈示の頻度　自己卑下呈示の頻度を確認するため「あなたは普段，自分が本当に考えている以上に，自分自身を好ましくなく，劣っているように周囲の人に伝えることがありますか」という1項目に対して回答を求めた。「全くない」から「非常に多くある」までの5件法であった。

結　　果

自己卑下呈示場面のイメージしやすさの評定の平均値は3.84（SD=0.81）であった。よって，各場面についてある程度イメージが可能であったと解釈した。また，自己卑下呈示の頻度の平均値が3.85（SD=0.80）であったことから，本調査の対象者がある程度の自己卑下呈示を日常生活において行っていると見なした。

分析に先立ち，自己卑下呈示規範内在化得点の信頼性係数を算出したところ α=.61であった。また，自己高揚提示規範内在化得点の信頼性係数は α=.64であった。続いて，自己卑下・自己批判的呈示授領後の被呈示者の自己評価測定尺度に対して主因子法，バリマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量の値が小さく，複数の因子に負荷していた1項目を除いたところ，2因子構造であることが確認された。第1因子は，自己の否定的な評価に関連した6項目から構成されていたことから，自己批判因子と命名した。また，第2因子は，自己をより向上させたいという項目から構成されていたことから，自己向上因子と命名した。信頼性係数を算出したところ，自己批判因子は α=.81であり，自己向上因子は α=.79であった。以後，これらの因子構造に基づいて算出された得点を用いて分析を行うこととした。

自己卑下呈示規範内在化傾向得点を平均値（M=30.87, SD=4.56）によって高群（M=33.94, SD=2.82）と低群（M=26.91, SD=3.09）に分類した（$t(124)=13.32, p<.001$）。自己卑下呈示の被呈示者の自己批判得点に対して，自己高揚規範内在化傾向得点を共変量とする，関係性2（知人・友人）×信憑性2（高・低）×自己卑下呈示規範内在化傾向2（高群・低群）の3要因の共分散分析を行なった。その結果，関係性×信憑性の2要因の交互作用が有意であった（$F(1,117)=3.97, p<.05$）。下位検定の結果，知人による自己卑下呈示は，信憑性高条件よりも低条件において自

Table 1　自己卑下・批判的呈示受領後の被呈示者の自己評価測定尺度の因子分析結果

	因子1	因子2	共通性
自分は他の人よりも優れている（逆転）	**−.724**	−.033	.526
自分に自信がある（逆転）	**−.681**	.032	.465
自分には誇れるところが何もない	**.611**	.257	.439
自分は他の人よりも劣っている	**.594**	.422	.531
自分は全くうまくできていない	**.541**	.241	.351
自分に満足している（逆転）	**−.524**	−.068	.279
自分には努力すべきところが残っている	.150	**.752**	.588
自分をさらに向上させたい	−.055	**.712**	.509
自分をもっと改善したい	.145	**.705**	.518
自分には反省すべきところがある	.333	**.628**	.505
固有値	3.84	1.90	
寄与率（%）	38.38	18.98	

Note.　5件法。主因子法，バリマックス回転による。

己批判傾向を生じさせることが示された。また，信憑性の低い自己卑下呈示が，友人よりも知人によって行われた場合に自己批判傾向が生じることが示された（Figure 1）。

また，3要因の交互作用が有意傾向であった（$F(1,117)=3.05, p<.10$）。下位検定の結果，自己卑下呈示を受けた場合，自己卑下呈示規範内在化傾向高群は，関係性の違いや信憑性の程度にかかわらず自己批判傾向が生じることが示された。そして，知人による信憑性の高い自己卑下呈示は，自己卑下呈示規範内在化低群には自己批判傾向を生じさせないが，自己卑下呈示規範内在化傾向高群の自己批判傾向を生じさせることが示された。さらに，自己卑下呈示規範内在化低群は，知人から信憑性の高い自己卑下呈示よりも信憑性の低い自己卑下呈示を受けた場合に，自己批判傾向を生じさせていた。また，知人から信憑性の高い自己卑下呈示を受けた場合よりも，友人から信憑性の高い自己卑下呈示を受けた場合に，自己批判傾向を生じさせていた（Figure 2）。すなわち，自己卑下呈示規範内在化高群は，他者の自己卑下呈示に対して自己批判傾向が付随するのに対して，低群の自己批判傾向は相手との関係性および信憑性に大きく影響されることが示された。そして，友人による信憑性の高い自己卑下呈示が自己批判傾向に及ぼす効果が，自己卑下呈示規範内在化の程度によって大きく異なる可能性が示唆された。

続いて，自己卑下呈示の被呈示者の自己向上得点に対して，同様の3要因の分散分析を行なった。その結果，関係性×信憑性の2要因の交互作用のみが有意であった（$F(1,117)=4.60, p<.05$）。下位検定の結果，信憑性が低いよりも高い自己卑下呈示を友人から受けた場合，受け手に自己向上傾向が生じることが示された。また，信憑性の高い自己卑下呈示を知人よりも友人から受けた場合，受け手に自己向上傾向が生じることが示された（Figure 3）。

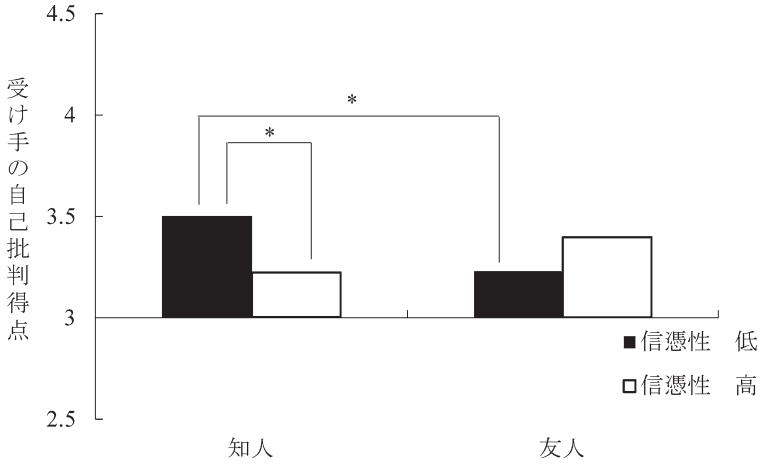

Figure 1　関係性および信憑性が受け手の自己批判得点に及ぼす影響
Note. *$p<.10$

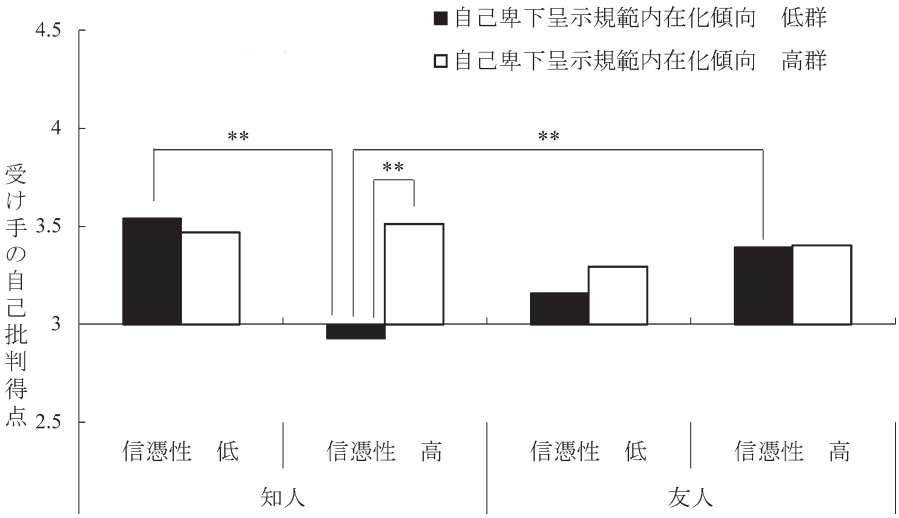

Figure 2　自己卑下呈示規範内在化傾向，関係性および信憑性が受け手の自己批判得点に及ぼす影響
Note. $^{**}p<.05$

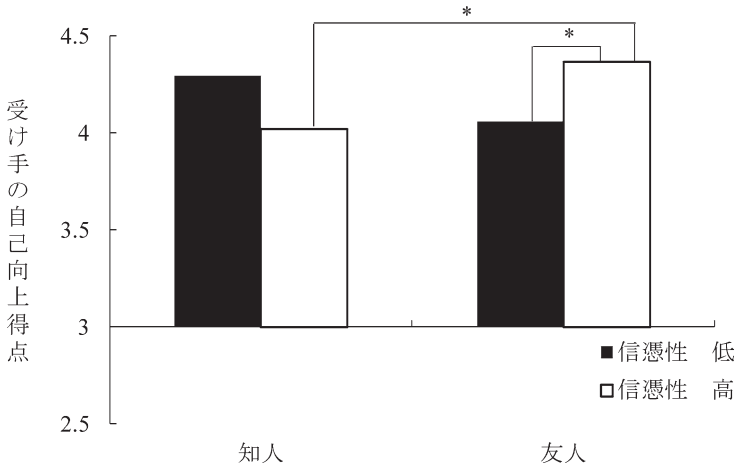

Figure 3　関係性および信憑性が受け手の自己向上得点に及ぼす影響
Note. $^{*}p<.10$

考　　察

本研究の目的は，他者の自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす影響について明らかにすることであった。特に，これらの影響過程に呈示者と受け手の関係性，自己呈示の信憑性，受け手の自己呈示規範内在化傾向が及ぼす効果を検討した。

分析の結果，知人の信憑性の低い自己卑下呈示は自己批判傾向を生起させること，友人の信憑性の高い自己卑下呈示は自己向上傾向を生起させること，自己卑下呈示規範内在化高群は，他者の自己卑下呈示に対して常に自己批判傾向を生起させるが，自己卑下呈示規範内在化低群は，相手との関係性や信憑性によって自己批判傾向が生起しない場合があることが明らかとなった。本研究には，調査参加者が女性のみであること，シナリオを用いた研究であるといった限界はあるものの，自己卑下呈示が受け手の自己評価に影響を及ぼすことを明らかにした。また，他者の自己卑下呈示による自己批判傾向と自己向上傾向の生起が相手との関係性と自己呈示の信憑性によって左右されることを示した。

では，なぜ相手との関係性や自己呈示の信憑性によって自己評価に及ぼす影響が異なったのであろうか。本研究では，「相互作用の予期」がある場合はない場合よりも相手の行動による影響を受けやすいこと（笠置ら，2008）から，知人よりも友人の自己卑下呈示によって自己評価が影響を受けると予測した。また，受け手が呈示内容に関する信憑性が低いよりも高い時に自己評価に及ぼす影響が大きくなると予測した。よって，自己向上傾向の生起に関しては，先行研究に基づく予測と一致していたと考えられる。友人から信憑性の高い自己卑下呈示を受けた場合に受け手の自己向上傾向が顕著であったことは，受け手は，知人よりも友人が行った自己卑下呈示を自分自身に影響を及ぼす行為として捉えていたと考えられる。また，自己卑下呈示の信憑性の高さが，受け手自身の内省を促し，「自分も努力が必要である」と自己向上を志向したと考えられる。

なお，本研究の自己卑下呈示内容は，自分は「だめだ」「良いところがない」と伝えるというものであった。よって，呈示者と受け手の間に社会的比較が生じていた可能性も考えられる。社会的比較には，自分よりも優れた人と比較する上方比較と，劣った人と比較する下方比較がある。今回はどちらが生じていたかは明確ではないが，上方比較によって自己向上が生じる（Suls, Martin, & Wheeler, 2002 ; Wood, 1989）ことを踏まえると，受け手は，自己呈示内容に関する情報を持たないために，友人を自分自身よりは優れているだろうと判断し，自己向上傾向が生起したのかもしれない。今後は，他者の自己卑下呈示によって，どのような社会的比較過程が生じるのか，あるいは他の心理過程が生じるのかについて詳細な検討を行いう必要があろう。

一方，自己批判傾向の生起に関しては予測とは異なる結果が得られた。知人による信憑性の低い自己卑下呈示は，受け手に自己批判傾向を生じさせた。すなわち，親しくない人物から自己呈示の顕現性が強い振る舞いを受けることによって自己批判傾向が生起したのである。

鈴木・山岸（2004）は，知人は友人よりも相対的に規範的な振る舞いが出やすい相手であると捉えられていることを指摘している。そのため，本研究においても，受け手は，知人の信憑性の低い自己卑下呈示を文化的な自己卑下呈示規範に即した振る舞いとして捉えた可能性がある。そして，「規範的な振る舞いができる人物」と自分自身の間に対比が生じ，文化的あるいは社会的な規範を十分に満たしていない自分自身に注意が向いた結果として自己批判傾向が生起したのかもしれない。

なお，この効果は自己卑下呈示規範内在化傾向によって調整されることも示唆された。文化的な自己卑下呈示規範を強く内在化している者は，関係性や信憑性の程度に関わらず，自己卑下呈示を受けることによって，自己批判傾向が生じていた。自己卑下呈示規範内在化高群にとっては，他者の自己卑下呈示は，自己への批判的思考を促す刺激となっている可能性が考えられる。

一方，文化的な自己卑下呈示規範を内在化する程度が弱い人は，知人－信憑性低条件，友人－信憑性高条件よりも知人－信憑性高条件において自己批判傾向を生じさせた。自己卑下呈示を文化的に望ましい規範として内在化していない人であっても，文化的な規範に沿った振る舞いを行う人物と接することは，そのような行為を行わない自分自身に対する批判を生じさせるのかもしれない。また，自分よりも優れた友人の自己卑下的な発言を聞くことは，自己卑下呈示規範内在化低群であっても，自らに対する反省が促されるのかもしれない。対して，知人の信憑性が高い自己卑下呈示は，自己とは切り離して捉えられ，また，言葉通りにその人物が劣っている可能性もあると判断されたために，自己批判傾向が生起しなかった可能性が考えられる。すなわち，自己卑下呈示規範内在化傾向低群と高群では，他者の自己卑下呈示が持つ意味とその効果が大きく異なっていることが示唆されたといえる。

他者から自己卑下呈示を受けることによって，受け手の自己評価が影響を受けるという結果は，「なぜ」自己卑下呈示規範の内在化が生じるのかという点を考える上でも興味深い結果であると言える。すなわち，日本文化において，自己卑下呈示規範の内在化を促進させる文化的なしかけは2通りあるのかもしれない。ひとつは，望ましいと思っていない呈示者に対して周囲が好意的反応を返すことによる促進，すなわち自己卑下呈示が脅威ではないと思わせるというもの（吉田・浦，2003b）である。もうひとつは，本研究によって示唆された，周囲の他者から自己卑下的に振る舞われることで，自らの中に自己批判傾向が生起し，そのネガティブな感情や，文化的規範と自己呈示規範内在化傾向の間にある不協和を解消するために，自己卑下呈示規範を徐々に内面化するというものである。今後は，自己呈示に関する文化的規範がどのようなコミュニケーション過程を経て形成されあるいは変容するのかに関する検討も必要であろう。

本研究の限界

最後に本研究の抱えるいくつかの問題点を指摘する。沼崎・工藤（2003）が明らかにしたように，自己呈示の効果に関する研究において，実験室実験とシナリオ実験では異なる結果が生じることが報告されている。本研究は女子大学生に対してシナリオを用いて条件操作を行っている。今後は，実験室実験が必要であろう。また，より日常的な文脈において影響過程について検討する必要があると考える。本研究は，自己卑下呈示が受け手の自己評価に影響を及ぼすことを明らかにしたが，行動面にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行っていない。受け手が，自己批判や自己向上傾向に基づきどのような行動を生起させるのかについて検討する必要があるだろう。

さらに，本研究では自己卑下呈示の次元・領域を明確に指定していない。能力や性格など，自己呈示に含むことができる内容は多岐にわたる（伊藤, 1999）。自己呈示次元が異なることによって，自己批判や自己向上傾向の生起頻度が異なるのかを検討する必要がある。例えば，能力よりも性格に関する自己卑下呈示が行われても，当該領域の自己関連性が低い場合には，自己評価に影響を及ぼさない可能性もある。また，先述したように，他者の自己卑下呈示によって自己批判や自己向上が生じることが，人々が日本文化に適応してゆく上で，どのような意味を持つのかについても実証的な検討を行うことも重要であろう。今後は自己卑下呈示が受け手に及ぼす影響について，より多面的な検討が必要であると考える。

引　用　文　献

相川　充（2003）．謙遜行動に及ぼす社会的スキルの効果に関する実験的研究　東京学芸大学紀要，54, 93-101.

福島　治（1996）．身近な対人関係における自己呈示：望ましい自己イメージと自尊心及び対人不安の関係　社会心理学研究，12, 20-32.

石黒　格・村上史郎（2007）．関係性が自己卑下呈示に及ぼす効果　社会心理学研究，23, 33-44.

伊藤忠弘（1999）．社会的比較における自己高揚傾向：平均以上効果の検討　心理学研究，70, 367-374.

稲富　健・山口裕幸（2004）．自己卑下呈示が受け手に与える印象 ― 受け手が認知する呈示者の作為性との関連　九州大学心理学研究，5, 201-206.

笠置　遊・外山みどり・大坊郁夫（2008）．会話中における話者の自己呈示スタイルの相互関連性　対人社会心理学研究，8, 59-64.

樋口匡貴・川村千賀子・原　郁水・塚脇涼太・深田博巳（2007）．対人印象に及ぼす自己卑下呈示の効果の規定因　広島大学心理学研究，7, 103-108.

Jones, E.E., & Pittman, T.S.（1982）. Toward a general theory of strategic self-presentation. In J. Suls（Ed.）, *Psychological perspectives on the self*, Vol. 1. Erlbaum, pp. 231-262.

村上史郎・石黒　格（2005）．謙遜の生起に対するコミュニケーション・ターゲットの効果　社会心理学研究，21, 1-11.

村本由紀子・山口　勧（1994）．自己呈示における自己卑下・集団高揚規範の存在について　日本社会心理学会第35回大会発表論文集，222-225.

沼崎　誠・工藤恵理子（2003）．自己高揚的呈示と自己卑下的呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果 ― 実験室実験とシナリオ実験との相違 ―　実験社会心理学研究，43, 36-51.

Leary, M.R., Allen, A.B. and Terry, M.L.（2011）. Managing social images in naturalistic versus laboratory settings : Implications for understanding and studying self-presentation. *European Journal of Social Psychology,* 41, 411-421.

Leary, M.R., Nezlek, J.B., Down, D., Radford-Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A.（1994）. Self-presentation in everyday interactions : effects of target familiarity and gender composition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 664-673.

Schlenker, B.R., & Pontari, B.（2000）. The strategic control of information : Impression management and self-presentation in daily life. In Tesser, A., Felson, R.B., & Suls, J.M.（Eds.）, *Psychological perspectives on self and identity,* American Psychological Association Press, pp.199-232.

Schlenker, B.R., & Weigold, M.F.（1992）. Interpersonal processes involving impression regulation and management. *Annual Review of Psychology*, 43, 133-168.

Suls, J., Martin, R., & Wheeler, L.（2002）. Social Comparison : Why, With Whom, and With What Effect? *Current Directions in Psychological Science*, 11, 159-163.

鈴木直人・山岸俊男（2004）. 日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験研究　社会心理学研究, 20, 17-25.

Tice, D.M., Buttler, J.L., Muraven, M.B., & Stillwell, A.M.（1995）. When modesty prevails : Favorability of self-presentation to friends and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1120-1138.

吉田綾乃・浦　光博（2003a）. 自己呈示規範の内在化傾向に関する探索的研究 ― 日本人大学生における検討 ―　自己心理学研究, 1, 27-39.

吉田綾乃・浦　光博（2003b）. 自己卑下呈示を通じた直接的・間接的な適応促進効果の検討　実験社会心理学研究, 42, 1-11.

吉田綾乃・浦　光博（2004）. 日本人の自己卑下呈示に関する研究 : 他者反応に注目して　社会心理学研究, 20, 144-151.

吉田寿夫・古城和敬・加来秀俊（1982）. 児童の自己提示の発達に関する研究　教育心理学研究, 30, 30-37.

Wood, J.V.（1989）. Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, 106, 231-248.

The influence of self-effacing presentation on the perceiver's self-evaluation : Examining associations between interpersonal relationships, authenticity of self-presentation, and internalization of self-presentational norms

Ayano Yoshida

This study examined the influence of self-effacing presentation on perceivers' self-evaluation. We explored associations between interpersonal relationships (friends vs. acquaintances), the authenticity of self-presentation (high vs. low), and the internalization of self-presentational norms (high vs. low). One hundred thirty-three female Japanese university students completed a questionnaire. Results suggested that (1) perceivers displayed self-criticism when exposed to an acquaintance's low-authenticity self-effacing presentation, (2) perceivers displayed intentions towards self-improvement when exposed to a friend's high-authenticity self-effacing presentation, (3) and individuals high in internalization of self-effacing presentational norms always experience self-criticism as a result of exposure to others' self-effacing presentation. Conversely, the presence of self-criticism in individuals low in internalization of self-effacing presentational norms was influenced by interpersonal relationships and the authenticity of self-presentation. The paper concludes by discussing the possibility that perceivers' engagement in self-criticism as a result of exposure to self-effacing presentation in others contributes to the formation of cultural self-presentational norms.

Key Words : self-presentation, self-effacing, self-evaluation